

# おもしろい・たのしいまちづくり

## — かがしま探検の会の活動 —

---

東 川 隆太郎

### 1 持続できる活動のために

「かがしま探検の会」は、2001年12月に、特定非営利活動法人として認証され、本格的な地域づくり活動を始めました。今年15年目の節目を迎えることになります。立ち上げ当初は、鹿児島大学の学生や教官などが中心となり、鹿児島をテーマにした社会教育や地理教育の充実を主な目的としていました。その頃は、鹿児島県内においても NPO 法人自体が少なく、こうした団体による地域づくり活動が比較的新しい動きとして捉えられていましたし、実働メンバーの多くが20代の学生らということも注目を集めました。そして他の先輩 NPO 法人の支援や助言を頂きながら、手探りで事業を展開する日々が続きました。

当初は自分たちが学んだことを地域に還元する、という漠然とした想いで活動しており、事業化などの想定はあまりなかったのですが、当法人の目標のひとつである「鹿児島まるごと博物館構想」が固まってきてから、持続可能な地域づくりの展開を目指すようになりました。この「鹿児島まるごと博物館構想」というのは、一般的にはエコミュージアムと呼ばれるものです。簡単に表現するならば、屋根のない博物館ともいえます。博物館といえば建物があります。まるごと博物館の場合は、それが領域つまり、集落や地域、さらには島や半島を博物館として位置付けるということになります。また博物館では展示品がありますが、それは地域に点在する文化財や風景にあたります。ほかにも見えるものだけでなく、形のない伝説や方言、民謡といった情報も地域にとって大切な宝物であり、まるごと博物館では、これらもフルに活用することになります。こうした博物館づくりには専門家やよそ者と呼ばれる地域外の

人々が関わることでなる、違った視点から様々な地域の宝が発見されるきっかけが生み出されます。また、こうして発見した宝の活用を継続してすすめたり、それらを保存していくことには住民の参画が大事になってきます。こうした住民参画の場づくりが「まるごと博物館」では重要なのです。このように、鹿児島をフィールドにしながら、地域の方々にも参画していただき、「学びの場」「遊びの場」「仕事の場」をゆるやかに形成することを徐々に意識するようになったのです。

こうした活動のなかで、モットーにしてきた言葉があります。そのひとつが「がんばらない」です。市民活動をする言葉としては不適切のようですが、これには、無理をしないという意味も込められています。無理をすることが一番活動を継続することに支障があると考えています。自分たちの活動もそうですが、無理をしないというのは、地域や他者に対しても求めないということでもあります。それは自分たちだけががんばっていると確実に地域や他者に対しても自分たちくらのがんばりを求めたりすることもあります。それでは、地域などとの間に軋轢が生まれることもあります。そうなると、地域からも活動が浮いた存在になるし、まちづくりができなくなることもあります。だから自分たちも無理をしないのです。

次は「どうにかなる」です。これもなかなかいい加減な言葉のようですが、別な言い方だと、はじめの一步を踏み出す勇気を持ちましょうということでもあります。活動をしていて思うことは、常に新しいことに挑戦しないといけない場面によく遭遇します。その際に、これまで経験したことがないからできませんといった前例主義的な活動だと、新しい取り組みができなくなることもあります。これはもったいないことでもあります。だからこそ、どうにかなるくらいの気持ちでいることが活動の幅を広げてくれたりもするのです。

最後に「したくないことはしない」もあります。これも確かに自分勝手な言い方なのですが、別な表現をするならば役割分担ということです。できることはきちんとするけれど、できないことまで手を広げないということです。できないことまですると、上手にできずに周辺に迷惑をかけたり、または無理をしたりすることになるのです。それだと本来の活動ができなくなることもあります。また役割分担が上手にできたら、

ほかの団体や地域とも仲良くなるし、ひとつの事業が無理しなくてすむし、上手にできるひとたちとやることで、さらに広がることだってあるような気がします。まちづくりで役割分担は大切です。こうしたモットーで自分たちは活動していますが、この活動の基本にあるのは、足元の地域資源に対する気づきやそれらの情報発信、または再評価や価値付けであり、その手法の根っこが「まち歩き」でした。

## 2 活動の柱は「まち歩き」

現在は観光ガイドとともにまちを歩くことが全国的にも一般化しており、九州では長崎市や別府市、主要都市などにおいて、その手法が一定の成功をおさめているといえます。しかし、2001年時点では、「まち歩き」は少なくとも鹿児島県内では浸透していないどころか、地域の観光のおもてなしとして、公的に取り組む自治体や団体は全国的にもそんなにたくさんはありませんでした。

そこで、本法人は「まち歩き」の楽しさと活動を広く知っていただくため、定期的な「まち歩き」を継続的に行いました。当初は鹿児島市内を中心として、従来の観光地ではない身近な地域を約2時間かけてスタッフがガイドしながら歩くというスタイルでスタートしました。こうした定期的な「まち歩き」を月に二回くらいのペースで継続して開催し、回を重ねるごとに参加して下さる方も、会の趣旨に賛同して下さる方も増えるようになりました。歩く場所は住宅街や商店街、無人駅の周辺に農村・漁村集落と、生活圈ばかりです。それだけに事前調査や地域の人々との対話は不可欠ですが、この経験が「まち歩き」的な発想力として他の事業に反映できるようになりました。とくかく様々な「まち歩き」を展開してきました。例を挙げるならば、鹿児島を代表する観光地のひとつでもある城山が対象となります。城山は西南戦争の最後の激戦地としても知られていますが、実はそれだけでなく、600種くらいの植物が繁殖する天然記念物という顔もあります。また、桜島の火山活動のなかで最大の噴火ともいえる火砕流も遊歩道で確認できるし、12万年くらい前まで付近が海だった証拠となる地層もあります。これらをガイドしながら散策するのです。

「クリスマスイブに神社めぐり」というイベントもしました。これは

江戸時代初めに島津義久によって町割りが整備された国分の街なかにある神社をめぐるまち歩きでしたが、開催時期をクリスマスイブに行ったというものでした。クリスマスイブに神社めぐりという意外な組み合わせに興味を持たれた方々が参加してくれました。「歴史」をテーマにすると鹿児島県では幕末・明治維新期や戦国時代がすぐに思い浮かべられますが、実は新しい時代、つまり昭和や平成の出来事も大切なまち歩きのテーマとなる「歴史」だったりするのです。鹿児島における昭和の産物としてはまず団地があります。団地をめぐる鹿児島市街地の都市化の拡大が理解できたりします。また団地が造成される前は、小さな集落だったり農村地域だったりする場所もあります。これらは少しだけ古い地図などと比較してめぐると変化が楽しめたりします。古い地図は「埋め立て地」をめぐった時にも活用しました。昭和40年代から大規模に埋め立てられた鹿児島の沿岸部を、やはり古い地図と照らし合わせながらめぐると、意外な地域の表情がみえてきたりします。「まち歩き」は、このような比較が楽しみを生み出したりする、または自分の肌で体感できるところに醍醐味があるといえそうです。

### 3 観光ガイドの育成

「まち歩き」には案内してくれるひとが不可欠です。なぜなら文化財や風景は、それぞれが自らの背景にある物語まで語ることができないからです。だからこそ、言葉で伝えてくれるガイドは重要な役割を担ってくれるのです。こうしたガイドとともに地域を案内するというスタイルを活動の基軸にしていたことで、鹿児島県を中心にして観光ガイドやエコツアーなどの案内人育成に関わるようになりました。県内ではほぼ9割のガイド団体の講師や一連の講座のコーディネートに関わらせていただいています。

様々なガイドの組織は離島域まであり、それぞれの地域の方々がそれぞれのスタイルで活動しています。例えば、2015年は戦後70年となる年です。これに向けて戦争を静かに伝えてくれる「戦争遺産」の保存活用として戦跡ガイドの育成を海軍基地があった出水で担当しました。戦争を知らない世代が戦争を伝えるためには、やはり本物が残っていることが重要です。そのため戦跡の保存と同時並行でガイドの育成もしている

点が出水の場合は優れていると考えます。他にも屋久島では「里のエコツアー」と称した集落の人々が集落を案内するというおもてなしをはじめています。屋久島にも様々な集落がありますが、まず吉田集落が屋久島で一番最初に手を挙げて、その活動を始めました。吉田集落は、屋久島では北西部に位置していますが、有名な観光地や景勝地ではありません。それでも吉田集落には他の集落にはない魅力にあふれていました。そのひとつが巨石群でした。集落の人々が意外と当たり前にとこのことを考えていたのですが、とにかく生活空間に巨石が点在しているのです。ガイドが伝えなくていけないことは実は特別なことよりも地域の「当たり前」や「日常」が面白かったりするのです。それらは、地域外の人々にとっては、まさに特別なものであり非日常または異日常であったりするのです。これからの観光には、こうした地域の当たり前と出会うことに新鮮さを感じることが求められているのかもしれない。



吉田集落の巨石群

屋久島は世界自然遺産の島です。だからこそ、自然の仕組みを里でも伝えるおもてなしが必要ともいえるでしょう。その間にひとが入る仕組みがまさにガイドなのです。世界自然遺産といえば、平成29年度の登録を目指している地域が鹿児島県では奄美大島と徳之島があります。ここでも自然遺産の候補となる山林に入らずとも奄美の自然や文化に触れることのできる仕組みができないうか模索が始まっています。奄美市住用町や宇検村の集落でガイドの育成に関わりました。とにかく奄美の魅力は集落にあるのではとおもわせるくらいにシマといわれる集落には素晴らしいものがたくさんありました。例えば、神道と呼ばれる山と海を結ぶ神様が通る道が集落にはあり、それを汚さないように集落の人々が大切にしているということです。また奄美の自然を守り続けてき



ハブのラミネート加工

たのが「ハブ」です。遭遇はしたくないですが、興味はやはりあります。そこで集落のガイドの方には、自宅で捕獲したハブを見せやすいようにとラミネート加工して見せられるようにして、来られた方々をおもてなししようかと考えてもらったりしています。このように地域の魅力は「日常」の中に広がっているものだと思います。

観光ガイドはおとなの特権ではありません。年齢を問わず担うことができます。鹿児島県の施設のひとつ、石橋記念公園が主な活動拠点である子供のガイドの育成にも2007年の結成当初から関わり、児童・生徒の頃から地域の観光に関わることの道筋づくりのお手伝いもしています。ガイド技術や伝えるための知識量よりも、まずはおもてなしする気持ち、そして社会においてひとつの役割を担っているという充実感を温めていけるような助言や指導を心がけています。そしてこの考え方は、おとなのガイドにも通じると考えています。最近では、子供ガイド自らがおもてなしの企画を立案するようになりました。出番は少ないですが、大切なことはこどもたちの経験値です。つまり地域の歴史や文化を学び、それを伝えたという経験が、いつか役に立つと考えています。



### 3 かごしまグリーン・ツーリズム協議会

地域の資源をくまなく踏査しているうちに、地域が直面している課題にも目が向くようになりました。鹿児島県の高齢化率は全国でも高く、交通の便が不便な地域ほど、深刻な過疎化に直面しています。これらの地域は鹿児島県の一次産業を支えてきた地域でもあるので、地域の衰退は地域の産業の衰退も意味します。こうした事態の打開策のひとつとして、地域の NPO が中心となって取り組む教育旅行の受入が注目されています。地域の農家で体験を行い、民泊するプログラムを中学校や高校の教育旅行の中で取り入れる学校があり、その受入地域が鹿児島でも平成16年くらいからでき始めました。農家さん一軒一軒の想いや広域での連携が必要な取組ですが、裾野を広げるのは容易ではありません。専門の NPO の活動と平行して、当会メンバーで研修会を地道に続けたり、県への提言などを続けたりして、平成22年5月には県域の協議会設立までこぎつけました。鹿児島の一地域から始まった取組ですが、地域の文化を伝えるためにも効果的な事業という確信があります。当会でその事務局を担い、グリーン・ツーリズムに取り組む地域の方々の負担や、ノウハウの提供を全県的に行うことで、不安負担を軽減するお手伝いができればと思っています。平成24年度には農家民泊をプログラムに採用した鹿児島県への修学旅行生数は2万人を超えました。つまり、約10年前に始まった農家民泊の事業が、ある程度浸透してきたことを示す数字といえます。ただ、数が増えるということは、それだけリスクを増えるということもいえます。そこで講習会の徹底や農家民泊を行う農家さんや漁家さん同士の交流の場を設けることで、喜びや悩みの共有も図っています。さらに農家民泊は教育旅行に限定されるので、簡易民泊の許可を取得し、一般客もグリーンツーリズムを体験したり、交流するなどしながら農的な暮らしを体感してもらう農家民泊の開業も進めています。これにより、鹿児島県の一次産業の魅力を幅広く伝えながら、鹿児島らしいツーリズムの在り方を模索しつつあります。

### 4 近代化遺産とジオパークへの取組

鹿児島の歴史というと、幕末明治維新に活躍した、西郷隆盛や大久保利通など、政治的に活躍した人物の話は広く知られていましたが、その

時代的背景などは案外知られてきませんでした。そのひとつが、同時代に薩摩藩の藩主であった島津斉彬が推進した「集成館事業」です。斉彬の父・斉興の時代に成功していた財政改革、外圧の脅威に立ち向かうための軍備の近代化のみならず、斉彬は広く外国と貿易を結ぶことも視野にいれ、産業の近代化を目指しました。藩主就任7年にして急逝したため頓挫した部分もありますが、遺志は次の当主や家臣らに受け継がれ、明治維新というかたちで結実、そして日本各地の近代化への道筋のひとつを担ったのです。現在鹿児島県が事務局として「集成館事業」を含む「明治日本の産業革命遺産～九州・山口の関連地域」を世界遺産に、という動きがあります。ただ斉彬の事業、業績は「世界」のなかでの価値やその真正性については、県民にもあまり知られてきませんでした。そのことを市民にわかりやすく知ってもらうことが、郷土に対する愛着を生み、また歴史への認識を少し変化させることができると考えます。歴史は生活とかけ離れた物語ではなく、現在の私たちの生活にも繋がる一部だということです。このことを伝えるために、様々な切り口の出張講座や、まち歩きなども行っています。こうした活動は10年以上前から取り組んでいますが、近年は世界遺産候補の構成資産を有する地域の人々や大学生、さらには幅広いガイドのみなさんもネットワークを形成して、みんなで活動する仕組みをできつつあります。特に学生は、自ら清掃活動やイベントの開催を行うようになりました。これは、これまでにない活動の広がりともいえます。このように、地域の方々も含めてみんなで遺産登録を盛り上げていることが大切なのです。また他県のNPOとのネットワークも構築し、情報交換などを行っています。例えば、炭鉱の島である軍艦島を有する長崎県まで出向いて、その地域の人々と交流したり、佐賀県でシンポジウムを開催したりと、とにかく鹿児島県の枠を超えたネットワークも「明治日本の産業革命遺産」では重要になってきます。また、世界遺産の候補となる構成資産を有する町内会の人々に対しても世界遺産の理解を深めてもらおうと講座やまち歩きを開催しています。

地形・地質の世界遺産的価値として注目されつつある「ジオパーク」についても、微力ながら取り組んでいます。まず、ジオパークは世界遺産と比較すると、まだ一般的に知られていないことから、その周知や、



身近な地形・地質を楽しむ機会をつくることに力を入れています。そのひとつが指宿市での取組です。独特の火山地形が広がり、砂蒸し温泉などでも知られる有名な観光地でありながら、温泉湧出の背景や風光明媚な景観の形成には、これまで関心が払われてきませんでした。そこで、身近な「ジオ」を認識して、これらに楽しく親しむフィールドワークを中心とした勉強会をすすめています。行政も力を入れて、観光面においてもジオ的なストーリーを取り入れる流れは着実に推進されています。日本ジオパークに加盟している「桜島・錦江湾ジオパーク」では、これらの魅力をもっと知ってもらうようにと、とにかく「遊び心」を意識したイベントやまち歩きを、桜島ミュージアムという団体と連携しながら取り組んでいます。そのひとつが、都市のジオパークの確立です。特に桜島ジオパークとなると、やはり自然豊かな桜島が一番クローズアップされますが、実は鹿児島市街地側でもジオを楽しむことはできます。そのひとつが城山です。また錦江湾と桜島が絶妙な組み合わせで楽しむことができる展望所が寺山にあります。他にも路面電車の軌道式に敷かれた芝生の基礎は、錦江湾の湾奥が形成された際に噴出した火砕流堆積物である「シラス」が利用されていたりします。かごしま水族館や県立博物館も大事なジオパークを学べる場でもあります。このように、ジオパークは都市でも語ることができるのです。こうしたジオパークの楽しみ方の選択肢を増やす動きは、「霧島ジオパーク」や三島村とも連携して行っています。とにかく鹿児島県の魅力に地形や地質も重要であることを楽しく伝えていきたいと考えています。

## 5 大河ドラマ「篤姫」「龍馬伝」への対応

もう数年以上前のことになりますが、鹿児島県の観光における大きな出来事といえば大河ドラマ「篤姫」の放映がありました。篤姫は島津家分家の出でありながら、徳川家に嫁いだものの、政局の変化によって、戊辰戦争時には徳川家の人間として薩摩藩が中心となった西南雄藩と対峙しなくてはならなかったという波乱の人生を送った人物です。これまでさほど知られていないどころか、大河ドラマの放映決定時には「それはだれだ」という声も聞かれたほどでしたが、ドラマの好評もあって、空前の篤姫ブームに県内中が湧きました。しかし記録の少ない人物なの

で、観光客が鹿児島に期待をもって足を運んでくださっても、どこを案内すればよいのかという問題が起きました。従来の観光地では対応できなかったからです。そこでゆかりの地を探し、旅行商品としての提案や、放映時にドラマゆかりの地が紹介される「篤姫紀行」などにおいても、ロケ地の提案や台本作成などを微力ながら携わらせていただきました。また放映前には、観光客におもてなしができるようにとガイドを育成する事業にもたくさん関わりました。このガイドの活躍が鹿児島の観光を大きく、これまでとは違った動きに成長してくれたと感じています。この大河ドラマの放映は、幕末・明治維新时期における鹿児島にニューヒロインを生み出したことにもつながり、現在では銅像はゆかりの地に建立されるなど、本当に浸透しました。1年おいて続いた「龍馬伝」でも坂本龍馬が鹿児島に足を運んだ史実があったことから、ゆかりの地を観光地づくりするお手伝いをさせていただきました。大河ドラマの舞台になるということは、地域に目をむけるととてもわかりやすいきっかけになります。ここからスタートして、鹿児島を知る、歴史を知るという方が一人でも増えてくださればと思います。

## 6 マイヘリテージとしての「世間遺産」

世界遺産や文化財などをテーマとして活動するなかで、公的に認定または指定されて、保護や活用される遺産の重要性は認識してきました。ただ地域を眺めると、こうした公的な価値評価からは外れるかもしれませんが、それでも地域の文化や歴史を伝えており大切なものが多く存在することに気がつきました。これが約7年前のことです。そこで、ひとつの社会運動として、独自の認定または保存の道筋をつくろうと「世間遺産」の提言をはじめました。この動きは鹿児島の新聞社から注目されることになり、2006年6月から週に一回のペースで、2009年3月からは隔週で、鹿児島県内で「かごしま探検の会」が認定した「世間遺産」を価値や背景の解説とともに紹介する連載を持たせていただいています。独断による認定基準ですが、認定された遺産のある地域からは、様々な反応があり、地域ぐるみの保存が決まったり、イベントなどでの活用が検討されたりと、埋もれてきた地域遺産にひとつのいのちが吹き込まれるような瞬間が発生するようになりました。また世間遺産とともに、自



垂水千本イチョウ

然景観に関しては国立公園ならぬ「僕立公園」として認定し、そのひとつが、現在大隅半島の自治体における季節を代表する観光地として注目されるようにもなった「垂水千本イチョウ」です。この銀杏を長年管理してきた方から、ぜひ世間遺産に認定してもらえないかとのご相談を受けたのがきっかけでした。その方が看板まで設置され、いつのまにか幅広い支持を得られるようになりました。もちろん、世間遺産だから広がったのではなく、この方々の想いが結びついたと考えますが、世間遺産も少しは貢献できたのではないかと考えています。また、近年薩摩藩の英国留学生が出航した羽島という港町でも、私が世間遺産に認定した不可思議な階段を観光コースに地元の方々が採用してくれて、ちょっとした人気になっているといえます。錦江町の便所も同様ですが、ほかにも頼娃の地域づくり団体が、私が認定した駅の変った形状の便所を、面白いということで保存してもらおう動きにまで発展させてくれています。前述したように、世間遺産の認定は社会運動であり、地域に新しい視点や価値の共有を育もうとする活動なのです。また、地域に面白いものが増えるということは大切なことです。このように地域の活動やまち



羽島の階段



錦江町の便所

づくり、さらには資源の保存を面白がりながらする「気づき」や「きっかけ」がまさに世間遺産だったのです。

## 7 これからの展開と展望

「地域」の人々といっしょに汗をかきながら、そこから地域の意味や価値を見出し、かたちにするという姿勢は、これからも変わることがないと思います。ただ方法は、経験や積み重ねられる人脈などから広がりや工夫が生じないといけなく考えています。今後新たに取り組む方法のひとつが明治維新150年に向けた事業です。これは平成30年に明治維新から150周年を迎えることから、その気運を盛り上げていこうとするイベントの開催やプログラムの醸成です。主にイベントは、歴史といえど特定の年代の方々が楽しむものというイメージから脱却するように、特に女性や若者も楽しんでもらえるような内容で演出することを考えています。例えば、幕末偉人や出来事に関しての大喜利大会をしてみたり、当時の人々が食べていたであろう食事を再現したりするものです。明治維新をより身近なものに感じてもらいたいというのが趣旨です。このことで歴史を楽しむ人々の幅を広げたいとの思いがあります。

また鹿児島市街地において、戦国期までの城下町であった上町と呼ばれる地域で活動する任意の地域づくり団体と連携し、デザインや内容を工夫した「かんまち本」という売り物の読本も製作しました。これも地域に根ざした啓蒙や掘り起こしに繋がりたいとの考えで展開しています。

私たちの活動は、まだまだ行き当たりばったりの面が強く、また自分たちの努力よりも周辺に支えられながら、活動ができていく状況にあります。ただ、これまで様々な経験や事業を展開するなかで、なにが地域にとって大切で、どうしたら上手にできるのかは少し理解できてきたような気がしています。こうした経験値をさらに温めながら、地域から学んだことを、恩返しするような機会を多くつくっていきたいと考えています。

(NPO 法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事)